

地域のたから東西線編

沿線ぶらり散歩



第9回 連坊駅

仙台市博物館 学芸普及室長 菅野正道

下町の商店街

仙台一高の前でできた連坊駅。本来の地名は連坊小路で、その由来については、かつて国分寺の僧坊が連なっていた場所だからとか、付近に遊郭があったことから「恋慕小路」と呼ばれたことに発するなどの説があります。しかし、どちらも確証はなく、疑問符付きの由来です。

江戸時代には仙台藩の足軽町であった連坊小路は、近代に入るとさまざまな商店が立ち並び、また道に沿って仙台一高・宮城二女高（現、仙台二華高）があることから、若者も多く行き交うにぎやかな下町風の商店街となりました。その様子は、一高出身だった井上ひさしの小説『青葉繁れる』で、生き生きと描かれています。

昭和五〇年代以降、道路拡幅が進み、また



仙台一高の校内に残されている旧講堂の玄関部分

市街中心部や郊外の大型店舗が急増すると、古くからの小さな個人商店は少しずつ数を減らしていきました。街なみの変化だけでなく、一高や二女高の校舎も建て替えられ、春の名物だった一高の桜も、連坊小路沿いは道路の拡幅によって姿を消してしまいました。明治の名建築家として知られる山添喜三郎が設計した一高の講堂の玄関部分だけが、かつての面影を伝えていきます。

地下鉄東西線の開通もまた、連坊一帯の街並みの様子を、少しずつ変えていくきっかけになるのでしょうか。

政宗の茶畑

駅の目の前にある仙台一高の住所は、実は連坊ではなく「元茶畑」となっています。以前は、江戸時代の一時期、この付近に茶畑があったことが地名の由来、と考えられてきました。詳しいことは分かりませんでした。

そうしたところ最近、伊達政宗が仙台城下東郊に茶園を作らせて、その管理を命じる古文書が見つかりました。「元茶畑」の場所は、まさに仙台城下の東郊にあり、政宗が作らせた茶園はこの場所であることが資料からも裏付けられたことになりました。

この元茶畑付近は西から東に向かって低くなる傾斜地になっていますが、これは長町利府断層帯によって作り出された地形なのです。



この標高差約一〇メートルの傾斜地は茶の栽培に適した地形でした。傾斜地のために水はけが良く、また海岸から吹いてくる適度な水蒸気をおびた東風がこの傾斜にぶつかることによって生じる適度な湿度は、いずれも茶の栽培に適した環境だったのです。

茶の湯を好んだ政宗は、国元で作られた茶を知人の大名や茶人への贈り物に使うことがありました。その際に添えられた手紙には「おいおい宇治の茶にも負けない出来になる」と贈り物の出来栄を自慢する文章が書かれているものもあります。

政宗時代の仙台藩内における茶の産地としては、「山の寺（現在の泉区七北田の北部）」が知られていますが、政宗はより身近な所で思うままに茶を栽培させようと、この元茶畑の地での茶の生産を進めたものと思われます。残念ながら、この地での茶の栽培は、政宗没後三〇年ほどで途絶えてしまいました。しかし、政宗の茶に対する思い入れは、今でも地名として息づいているのです。近くには政宗晩年の居所であった若林城の門も残っています。政宗の面影を尋ね歩いてみませんか。

Musashi



特別展

雪舟と宮本武蔵と水墨画

—岡山県立美術館・珠玉の名品—

9月16日(金)~10月30日(日)

【特別観覧料】 一般:1,100円、高校・大学生:600円、小・中学生:300円

※10名以上の団体は100円引き。

※その他各種割引があります。詳しくはお問い合わせください。

主催:仙台市博物館 特別協力:岡山県立美術館 共催:河北新報社、NHK仙台放送局
後援:毎日新聞仙台支局、朝日新聞仙台総局、読売新聞東北総局、日本経済新聞社仙台支局、仙台リビング新聞社、TBC東北放送、仙台放送、ミヤギテレビ、KHB東日本放送、エフエム仙台、ラジオ3FM76.2

■資料写真:[左]枯木翫翠図(部分 三幅対のうち) 宮本武蔵筆、[右]重要文化財 山水図(傲玉瀾) 雪舟筆 ※いずれも岡山県立美術館蔵

Sesshu



仙台市博物館
SENDAI CITY MUSEUM

開館時間:午前9時~午後4時45分(最終入館午後4時15分) ●9月の休館日:毎週月曜日(9/19は開館)、9/20(火)、9/23(金)

TEL:022-225-3074

〒980-0862仙台市青葉区川内26番地(仙台城三の丸跡)

▶HP <http://www.city.sendai.jp/kyouiku/museum/> ▶Twitter @sendai_shihaku